



2012・6

**SORA** 43号

一書

柴田 佐知子

龍神となりつつ瀧の凍りけり

雪の夜の髪を黄泉へと梳る

黒シヨール足手まとひになつてやろ

海峡に潮の唸りや厄落し

みひらきて海へまつすぐ紅椿

三尊の二尊は低し春の雪

よく晴れし音立ててゐる雀の子

紅梅や高さ違へて父母の杖

休ませし田がふつくらと百千鳥

春まつり黒き煮しめを大盛りに

荒波の囲める島の野に遊ぶ

島を出て島へ落ちゆく夕雲雀

鳥雲に骨を正して柩へと

つつましき暮しに加へ桜貝

山ひとつ負うて出てくる墓

負鶏のかき消すごとく連れ去らる

産土の色まさりたる蓬餅

初蝶や附箋つけたる日々があり

雨のあと同じ貌して鯉五郎

はじめより結ばれて雛生まれけり

動かねば霞とならむ杖の母

持ち上げし猫がだらりと夕桜

曲水の宴や式部はみな老いて

桃さくら鐘に飛天は飛びつづけ

川底に魚のそよげる仏生会

手を握りかへして花の中にをり

よく跳ねて転げて子猫汚れざる

やはらかく父に飯炊く夕桜

普段着の紺に燕の来りけり

はかどらぬ齡となりぬ遠蛙

うららなる一と日うららに匂またがり

一畳は赤子に広し麦の秋

レース編む胸の中にも夜の山河

下萌や魚がもの言ふ魚籠の中  
鷹鳩と化してほつつき歩きをり  
夜桜や僧が通へる書道塾  
昼月のかかる蜩を搔きにけり  
子が花に勝手な名付け野に遊ぶ  
付文のごとくほぐる桜漬  
猫の子の爪の先まで驚きぬ  
大空にキリンの貌や春休み  
大岩を越ゆる大波栄螺焼く  
西国や黄砂の島に隠れ耶蘇  
春の星神馬はいつも待つばかり  
自らの色に覚めゆく桃の花

八十八夜 高倉 和子

近江路 中田みなみ

さくらさくら水面囃してあたりけり

永き日の塔婆がのぞく塀の上

燻されて人の出てくる御開帳

啄木忌鱈一と皿売れのこり

ふらここを漕ぎてどこへも行けさうな

近江路や雨の明るき花水路

竹とんぼ飛ばして春を惜しみけり

さくら咲く湖を珠<sup>たま</sup>玉とし城下町

白波の揃ひてきたる端午の日

菖焼きの匂ひ残れる手漕ぎ舟

粽解く山河はいつも胸にあり

漕ぎ行くや近江生れの鳶巢立つ

石段の途中八十八夜かな

おぼろかな水の中より竜神<sup>し</sup>祠

手応へのなき母の髪洗ひけり

浸す掌に目高集まりこんにちは

軍艦島 荒井千佐代

夕長し 柴田志津子

連山の紺を濃くして花菜かな

溪流を埋めつくしたる桜かな

あたたかや獣らはみな尾を持ちて

腕章の記者も来てゐる御開帳

神父様に移動命令花は葉に

春まつり媼がまとふ一張羅

入港の汽笛短し花ユツカ

受話器とるいつもの右手夕長し

軍艦島三句

接岸の艇を卯浪の引き離す

家系には稀なる齡百千鳥

軍艦島瓦礫・廃屋・蟻地獄

間を置かず手をあげたがる一年生

雨脚が支那海を来る金鳳華

万緑や真白き地熱発電所

軍艦島の正式名は端島

袋掛け高島・端島定位置に

終演のベル鳴る夜の新樹かな

鼓動 服部 早苗

子 だいじみどり

厄落用なき箱は捨つるべし

ねむい子を連れ初夏の京の旅

春一番ねぢれ棒疾き理髪店

形相のしのばるる声子供の日

開演の華やぎに似て鶯鳴く

号令に合はぬ体操桐の花

わが春の鼓動とらへし聴診器

日向柑とどく高さへ剪定す

芽柳や水車をまはすはけの水

抛りたる魚箱の山燕くる

万愚節じんべゑ鯨を見て飽かず

物置の奥の織機や早苗籠

一人静かくまひ咲きでありにけり

芥子坊主無理はしないと何もせぬ

三脚に石かませる暮の春

たんぽぽを撈りあるくや世捨人



千葉 原 友 子

穴を出し蛇ポマードをつけてをり  
 木の芽雨親切すぎて飽きらるる  
 目の位置のここでよいのか舌舐  
 鬪鶏に眉間のあらば太き皺  
 泥の香のうれしき田植日和かな

糸 田 宮 井 知 英

ほととぎす古井は鉄に閉ざされて  
 阻むもの無き夏山の迫り来る  
 たんぽぽや柵田の隅に牛馬の碑  
 さざ波の端の重なる植田かな  
 青田風さはさは鷺の飾り羽

福岡 田 代 貞 枝

棟木より頭梁の声揚雲雀  
 墨壺の糸のはじけて紫雲英の田  
 故郷なり踏んばる田芹摘むことも  
 重たげに畦の色して蓬餅  
 枝垂れ桜山傾けて日暮れけり

福 岡 栗 原 京 子

ロッカーをもとの広さに卒業す  
 じわじわと赤勝りたる躑躅山  
 香水や黒子はくちびるの横に  
 風雲児規律超越熱砂踏む  
 一列に水兵服や夏来る

粕屋 秋 千 晴

動物園匂ひも声も春めけり  
ペンギンと遠足の子の向き合うて  
掛けしごと豹のだらりと春の昼  
磯遊び足裏に魚の潜り来る  
剥製の麒麟に支柱夏初め

福岡 亀 井 紀 子

放鷹のくぐり抜けたる驟雨かな  
恋猫の影の行き交ふ硝子窓  
春昼や規則正しき鑿の音  
さへづりやひとりの昼をたのしまむ  
少女らの素直な返事聖五月

福岡 あさなが捷

使徒はいま祈りの中や花蜜柑  
五月雨やひとりといふはおそろしき  
古巣にはとりどりの紐残されて  
粹筋の乗り込んで来し舟遊び  
軍神となりて還りぬ夾竹桃

長崎 鳳 蛮 華

吉支丹のち切支丹島つばき  
青空を切貼りにして春のレール  
啓蟄や囁き坂の喫茶店  
芽柳の己れを容るる御簾の中  
海嘯のごとく垣越え雪やなぎ

福岡 矢野百合子

たんぽぽの顔して子らの見上げたる

花辛夷風によるこび過ぎしかな

牛放つ千里のうねり風光る

清め塩尖る八十八夜かな

夏めくやさしかと影置く百度石

粕屋 吉田 律

花冷えや観音さまの一張羅

揺れ合ひて花びら筏を組むところ

叱られて二階は広し花の雨

円本の黴の匂ひや父の留守

鮓料理昔酒場で鳴らしたる

大阪 田岡千草

雛の膳矯正箸が主賓にて

淡雪や衣桁に明日の緋打掛

相寄らず靴跡長し春汀

釣銭を吐く自販機や四月馬鹿

囀のすでに眩しき雨戸繰る

粕屋 長 憲 一

子も孫もぬけて二人で豆を撒く

たてがみの雪振り払ふ放れ駒

縦横に畦くつきりと雪影色

紅白の匂ひひとつに梅の花

道とへば顎で向うと雪の辻